上林暁文学のふるさと

大方あかつき館報

あかつき

第10号
2004年8月発行

上林暁の人と文学（二）

高知県経営者協会前専務理事　松本秀正

二、若者たちへの思いやりと励まし

ここで、上林さんが、不運な境遇の中で真剣に生きようとする若者たちへ、常に温かいまなざしを向け励まされたことをお話します。

その若者たちは、小説『子の世代』に出てきます。上林さんの息子徳広（小説では幸夫）の仲間ですが、「揃いも揃って親運に見放された青年ばかり」で、都会に出て悪戦苦闘する姿が描かれています。

福留（小説では福富）は、芸大の洋画科をめざして洋画研究所で、デッサンを勉強している画学生です。彼は上林さんのお世話で、薬品工場でアルバイトをしていますが、その穿いている靴は、上林さんのお古でした。福留がいつもおなかを空かしていることを知っていて、彼が訪ねてくると、食事を出されたり、相談事にも快くのってくれました。

上林さんは、福留について「彼はセザンヌに傾倒している。厳しく遙かな道に踏み出したばかりである。生活的にも、芸術的にも、彼が試されるのはこれからである」と、気遣ってくれるのです。

上岡（小説では亀谷）は、バイオリニストを志している音楽大の学生です。彼は、ロシアの音楽家モギレフスキイに認められるほどの腕を持ちながら、厳しい授業の中で自信を失い、ノイローゼで学校を休んだり、下宿を頻繁に変えたりします。ついに、退学して故郷の中村市へ帰ろうと思うようになります。

その上岡に、若き芸術家の悩みを見てとられた上林さんは、こう言って励まされるのです。「君がバイオリニストとして楽壇に立てるのは、あと数年で目の前にぶら下がっているようなものではないか。焦ったり、迷ったりしないで、そのまま学校にいて、みっちり基本的な勉強を叩きこんで頑張るんだ」。そして、彼にヘルマンヘッセの小説『春の嵐』を渡して、読むように勧めます。

『春の嵐』の主人公は、バイオリニストを志して、ドイツの首府の音楽学校に入学しますが、必修科目のピアノの授業が大きな苦痛となり、やがて修業全体が登り難い山のように思われてきて悩むのです。上岡の状況に似たストーリーの設定です。

そんなある日、彼は災難に遭遇します。草原を橇で滑走していたとき、暴走して転倒し、足に大怪我を負って不具の身になったのです。さらに不幸が追い討ちをかけるように、初恋の人も彼から去って行きました。

彼は地獄の苦しみの中をさ迷うのですが、やがて、その苦しみを乗り越えて、魂の叫びを綴った歌曲を発表します。その歌曲が、高い世評を得て、しだいに音楽家として大成していくのです。上林さんは、上岡にこの『春の嵐』を読ませることによって、励まし奮い立たせようとされたのだと思います。

私（小説では秀一）は高校を卒業して、二年間小学校の助教諭を勤めた後、東京へ出ることにしました。実はその前に、休暇で帰省していた徳広君に相談して、上林さんには無断で大学の〝保証人〟になってもらい、入学手続きをとったのです。

勝手に保証人にされたうえ、天沼の家に闖入してきた私に、上林さんは嫌な顔もされず、「君も志を立てて東京へ出てきたのだから、苦労するだろうが頑張るんだね」と、励ましてくれました。心の広い、温かい人でした。

私は、落ち着き先が見つかるまで天沼の家に置いてもらうことにして、その翌日から、上林さんの名刺を持って書生の口を当たったり、下宿探しに走りまわりました。どこへ行く時も、徳広君が同行してくれて、私はどんなに心強かったかしれません。彼は大学で建築学を修業している秀才でしたが、友情に厚く、いつも陰になり日向になって、私を助けてくれたのです。

ところで、私の場合郷里からの仕送りはなく、生活

費を自ら稼いで通学するというのですから、こちらの条件に叶った所が、そう簡単には見つからず、行き場がなくて途方に暮れているところへ、思いがけない好運が舞い込んできました。

睦子さんが、隣りの田嶋さんから「子供たちの勉強を見てくれれば、置いてやってもいい」という話を、聞いてきてくれたのです。そのとき、私は天にも昇る思いでした。

上林さんは、そのことを『子の世代』の中で、「ホトホト困っているところへ、天の運が向いてきた。これはアンデルセンの〝自伝〟に見るような、幸運にも比せられるべきものに思われた」と、書かれています。

田嶋さんの家では、姉弟二人の子供が私を兄のように慕ってくれ、ご夫妻からも家族同様に親切にしてもらいました。田嶋さん宅での生活にも馴れてきた頃、上林さんから、こう言われたことがあります。

「君は田嶋さんちにいて、親切にされて、これが世間並みだともし思い込んでいたら、大きな思い違いをしていたことになるよ。世間一般は、もっと冷酷なんだからね。決して甘い気持を持ってはならんよ」。

三、上林さんに教えられたこと

「あまり焦るな」

ある時、上林さんが「物事に行き詰まっても、あまり焦らないことだな。時間が解決することも多いんだ」と、言われました。私が何かの問題で、思い屈している様子を見られたのかもしれません。その時の私は、こう思ったのです。〈自分の問題は、自分で解決するしかない。今の私には時間が無い。悠長なことは言っておれないもの〉。

しかし、私は後になって反省し、恥ずかしい思いをしたことがあります。考えてみますと、私たちは、人間関係をはじめ多くの物事を解決するにあたって、一定の時間を置くことが必要な場合があります。時間を置くというのは、勇気が要りますが、これは大切なことです。よく見ていますと、一定の時間が経過することで、問題解決へのチャンスが、自然に開けてくることがあります。私は、そのことに気付いたのです。

また、私たちは生きて行く上で、色々な問題に直面し、どの道を選ぶべきかの決断を迫られる時がありますが、その時、人はよく迷ったり悩んだりします。ここで大事なことは、冷静な思慮分別ですね。焦ったり、慌てていて良い判断ができるわけがない。上林さんは、そのことを言われたのです。

『指導者』をめぐって

一九五五年（昭和三〇年）の秋、私が大学二年のとき、英文学者本多顕彰氏が、『指導者―この人々を見よ―』（光文社）という本を出されました。

本多先生は、シェイクスピアや英国近代小説の研究で大きな足跡を残された人で、私が高校生のとき、新潮社から出た「新文学講座」第一巻の理論編に、本多先生の『文学の世界性』が載っていて、大へん文学開眼された記憶があります。私は大学は法学部でしたが、時間があれば、先生の講義にもぐりこんでお話を聴き、大いに啓発されました。

『指導者』は、戦時中は軍国主義に協力し、戦後は民主主義者に豹変したインテリを、実名で批判したのです。たちまち世論が巻き起こり、大ベストセラーになりました。

そのような中で、上林さんは『指導者』に対して厳しい見方をしておられました。私に、こう言われたのです。「本多さんは、多くの人たちを名指しで批判されたが、一番傷ついたのは、本多さんご自身ではないかな」。本多先生を敬愛していた私には、ショックでした。

本多先生は、それから九年後に『歎異抄入門』を出されるのですが、私は後年になって、先生がこの一冊出されたのは、過ぎ来し方をふり返られ、省みるところがあったのではないかと、考えるようになりました。

四、上林文学の魅力

該博な知識と教養

私は、上林さんの小説を読むたびに、簡潔で透明な文章、精密極まる情景描写に引きつけられます。また、題材が深刻であっても、陰惨な感じを与えないのです。それは、どんなに苦しいことに直面しても、常に人生を肯定する思想があるからではないかと思います。そして、なんといっても上林文学の魅力は、その該博な知識と深い教養にあります。

上林さんは、若いとき画家を志したこともあっただけに、絵画についても造詣が深く、また、音楽に対する知識も、『マヅルカ』を読むと分かるように、音楽通でもありました。たいへんな読書家であったことは、言うまでもありません。

蔵書の重みで、根太が落ちたことがあったそうです。大工を呼んで、大きな丸太を入れて補強工事をされた。「さあ、これだけ強くしたので、この床の上で大相撲をとっても大丈夫だ」と言って、喜ばれたという話を聞いたことがあります。

上林さんの読書欲は、病気で倒れ、寝たきりになっても衰えなかったことが、睦子さんの『兄の左手』に出てきます。

「いつも兄の枕元には、四五冊の本が積んであった。平行して読むのである。大体一冊三日の割で読みあげた。不自由の身で、不自然な姿勢で読むのだから、読み上げたときは、古本のようになっていた」。

「名作といわれるもので、まだ読んでいなかった本、寄贈本などの外に、雑誌や新聞の広告を見て、長女や私に買ってこさせた。また、編集者に頼んで買ってきてもらった」。

寝たきりのままで、デュマ、スタンダール、エミール・ゾラ、ボードレール、その他多くの作品を読み、マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』全七巻にあっては、四年かけて読破されたということに、私は圧倒されました。

さて、上林さんは小説の中で、しばしば逸話を巧みに引用して、読者を知的興奮に誘い、感動を与え、そして深く考えさせます。ここで、上林さんの像が彫塑される場面が出てくる『ブロンズの首』と、奥さんが亡くなられて、火葬場で遺骨を拾う情景が描かれている『孀恋ひ』の一部を読むことにします。

『ブロンズの首』

「私は病後なので、どてらを着て、大きな火鉢を抱えて縁側に座った。疲れるので蜜柑を用意して、ときどき食べた。久保君は、その私を見詰めながら、粘土をこねた。ロマン・ローランは、彼を彫塑する高田博厚に向って、『君は指先で思索しているんだ』と言ったそうだが、久保君の指先を見ていると、正しく思索しているのだ」。

『孀恋ひ』

「骨は箱に入りきらなかった。すると隠坊は、手許に備えた小さな擂粉木のような棒を取って、骨をぎしぎし揉み込み突き込んで、箱の四角にも行き渡るようにした。私はその時ふと、フロオベルの手紙で読んだことを思い出した。フロオベルの母が死んだとき、棺を墓穴に下ろそうとして、墓穴が小さくて棺が入りきらないのを見ると、人夫達は、棺の上を土足で踏んづけて、押し込んだというのだ。

フロオベルはそれを見て、ひどく残酷な所行のような気がして、心を痛められたことを書いていた」。

（次号に続く）

漢字と仮名（一）

上林暁顕彰会顧問　浜田数義

あかつき館から館報への原稿を寄せてほしい旨の連絡があり、急がないなら何か書きましょうと返事をしていた。

さて、書こうと思って机に向うと何も書くものがない。若い頃は気が向くままに、国文学から方言学、方言学から民俗学、文学・伝説何でもござれと渡り歩いてきたのに、半年近くも病院生活をしている内に、みんな闇の彼方へ消えてしまっている。

そうだ、毎日書く日記の文字さえ漢字を忘れて辞書を引かねばならないことが多くなった。漢字を忘れるので漢字のことを書こう、ついでに仮名のこともと欲が出て、以下「漢字と仮名」と題して、思い出すままに書くことにする。

漢字と仮名は、我々日本人が普段使っている文字である。しかし、漢字はもともと文字どおり漢という国の文字である。漢という国は、お隣の中国の古代（紀元二千年前後に四百年も続く）国の名で、その漢からすぐ隣の朝鮮南西部にあった百済の国を経て日本へ漢字文化が渡ってくるようになった。

日本には文字が無かったので、文章を書く時には漢字を借って日本語を書かねばならないので、漢字の意味を日本語に訳して使った。例えば、四季の名を書く時には、春夏秋冬と漢字で書き、これを訓む時には波留、奈津、安起、布由と漢音の助けを借った。

我が国が世界に誇る万葉集には、日本上代の和歌四千五百十六首が集められているが、当時は仮名が無かったので全部漢字ばかりで書かれている。

例えば、万葉集巻一の二十八番目にある持統天皇の御歌は歌カルタの百人一首の中にも選ばれている名歌であるが、万葉集の原典には次の如く書かれている。

春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香来山

これを和歌として現代流に訓む時には

春過ぎて夏来るらし白妙の衣乾したり天の香具山と

訓むので、百人一首のカルタ取りをした人にはすぐ判るのである。

第一句「春過而」は、最後の而をてという助詞として使い、第二句「夏来良之」は、来るを来たるという動詞、それにらしという助動詞を付けたもの、第三句「白妙能」は、能をのの助詞として使い、第四句「衣乾有」は、乾を干すの動詞とし、それに完了の助動詞たりを有で表したもの、第五句「天之香来山」は、天の次に之を助詞として入れ、普通は香具山と書くべき所を、香来山としている。

こうして見てくると、漢字の意味と音と訓を自由に組合わせ、一首の名歌に仕立てあげている。

然しいつも都合よく事が運ぶわけではなく、漢字ばかりを並べた四千五百余首の万葉作品の訓読には、今だに未解決な作品もかなり残っている。

例えば次の作品

（9）莫囂圓隣之大相七兄爪湯氣吾瀬子之射立為兼五可新何本

「幸千紀温泉之時、額田王作歌」と、はっきりした題詞があり、作者も有名な額田王と明記しているのに、この作品は万葉集の解説が始まった鎌倉時代の仏覚以後、国文学者という名のつく大家が取組んできたのにまだ納得のいく解読がないと言われている難解歌である。

昭和万葉学界の最高峯京都大学教授沢瀉久孝先生は、「万葉集注釈」で、古訓十例を挙げた後、最後に次の如く訓んでいる。

静まりし浦浪さわぐ、吾が背子がい立たせりけむいつ樫が本

（つづく）

上林暁文学のふるさと
あかつき
第10号

文化振興係からのお知らせ

ビデオ上映会

図書館では、夏休み期間中の下記日時に、あかつき館において、アニメや洋画ビデオの映画上映会を開きます。
小学校低学年から高学年・中学生などを対象に計画しました。入場は無料です。多くの皆さんの参加をお待ちしています。
また、この上映会に併せて、19日と22日は、午後８時まで図書館を開けますので、どうぞご利用下さい。

上映プログラム　《上映場所：大方あかつき館レクチャーホール》

月　日（曜日）	午前の部	午後の部	
	午前10時から	午後２時から	午後６時から
８月１７日（火）	トムとジェリー	うしろの正面だあれ	
１８日（水）	ＣＯＯ	学校の怪談	
１９日（木）	サトラレ	ドラえもん	はだしのゲン
２２日（日）	西遊記	I am Sam	千と千尋の神かくし

（注：上映内容は、変更する場合があります。ご了承下さい。）

第八回上林暁忌俳句大会

日　時　平成16年８月28日（土）
　　受　　付　９時30分～
　　投句締切り　11時30分まで
場　所　ふるさと総合センター
講　師　橋田憲明（高知県立文学館長）
参加費　1,000円（当季雑詠４句）

玄関の改善

あかつき館正面玄関が、自動ドアになりました。これまでは中央に手動の回転ドアが設置されていましたが、高齢者や車椅子の出入りに支障があり、自動開閉式のドアに付替えしたものです。夏休み期間中は、多くの方にあかつき館を利用して頂いていますが、より安全に利用できることになりました。

明るく改修された玄関ドア

大方あかつき館
〒789-1931 高知県幡多郡大方町入野6931-3
TEL:0880-43-2110 FAX:0880-43-0222